

印度視察談

今泉嘉一郎

茲に印度視察談をなすに當つては、是から段々と印度へ視察に行く人のためにもならんかと存じて、先づ以て予の旅行當時の日記の大略を掲げて次に聊か製鐵關係のことに及んだ

一 印度旅行概要

此時大正元年十月二十五日、佛國マルセイユ港を出帆するビーラー會社のマンツア號に便乗して歸朝の途次、印度の製鐵事業を視察することにした、此船は濠洲行のものであつたから、十一月三日アデーンでサルセット號に乗り替へて同月八日ボンベーに着いた、此處で印度へ上陸することになつた。

印度の税關は格別面倒のことはなかつたが、唯獵銃でも何でも武器や夫れらしいものだけは随分入釜しい。予は勿論そんな物は持たなかつたが、一寸した物でも例の五%均一と言つたやうな税率で、行李の中の懷中時計には五%の税を拂はせられた、通辯の様な者が來て親切に世話して呉れたが何のことだ！是は職業的通辯で五留比の請求を受けたが三留比に負けさせてやつた、夫から雇馬車でタイマナール・ホテルに着いた。

此日は印度の大晦日で何れの事務所も休業だ止むを得ず、郵船のボンベー支店箕作氏を自宅に尋ねて案内を受け、正金支店長五十嵐氏を其の社宅に訪ふて中食の饗應を受け、夫より郵船の自動車で半島の尖頭迄海岸のドライブをなし、日本クラブの訪問やらピクトリヤ公園、博物館、動物園等の見物

もした、夫れでホテルに歸つたが、晚餐は船中と同じくスモークキング、ジャックケットで暑くとも仕方がない客の大半は夫れだ。

十一月九日、印度内地旅行に要する從僕の雇入れを初め書物や汽車切符の買入等夫々準備した、從僕はフランシスと稱する印度人で英語が出来る、寫眞と身元證明とを取つて旅行中雇入の約束をした、郵船支店次長川口氏や五十嵐氏箕作氏の親切なる見送りを受けつゝ、九時十五分の夜汽車にてピクトリヤ、ターミナス驛より出發した、手荷物が多過ぎると改札口で文句を聞いたが事なきを得た。

是より先き船中にて予の胸に着けた米國鑛山技師協會の會章が縁となつて、鑛山技師マンズと云ふ英人と懇意になつて同氏の關係せる印度中央州ジャツブルポール市の附近にあるボーキサイト鑛區を視察する約束をなすに至つた、依てマンズ氏は一足先きに同市へ歸つた。

此夜は汽車の塵だらけの寢臺の上に一夜を明した、上の寢臺にも保護帶もなく稍危険を感じた。

十日、今朝初めて印度内地の様子を汽車から見た空漠たる原野、處々に菩提樹らしきものゝ點々傘の様になつて繁つて居る景色、野猿の一家族が汽車に驚いて驅け廻る有様などを見つゝ五十嵐氏に贈られたる日本新聞を讀んで居る間に早くも午後五時セントラル・プロヴィンス(中央州)の首要部落たるジャツブルポール驛に着いた、茲に先着のマンズ氏は其資本主たる印度人、ダット氏と共に迎へに來た、多分王様の専用馬車とも思はれる金線などの禮装をした馭者が、立派の馬車でやつて來た、之に同乗して部落を一週して、ホテルに入り

禮装に着替へて、招待を受けたるダット氏の晩饗に行つた。

十一日、マンス、ダット兩氏の案内でジャツブルポール驛より汽車に乗り二時間にてカトニ驛に下車、夫より手押トrolleyに乗り二哩にしてボーキサイト鑛山に到る。

ボーキサイト鑛山はボーキサイトの鑛層五十呎乃至六十呎にして鑛量二百萬噸と稱せらる、借區面積四萬八千エーカーありと云ふ此鑛區中には陶土及セメント粘土もありとのことにて目下陶器製造會社とセメント會社とが創立され工場設計中なりと云ふ、セメント工場の技師長兼支配人は倫敦より招聘された人で年俸一千二百ポンドであるとのこと、歸路同氏の宅にて中食の馳走を受け夕刻の汽車にてジャ・驛に歸る、印度式の入湯をなし禮服に着替へ例の立派な馬車の出迎を受けて、ダット氏邸の晩饗に趣くこと例の如し。

十二日、自動車一臺を汽車に乗せマンス、ダット兩氏と共にジャ・驛を出發六時間にしてラムタ(Lantha)驛に到着し、バンガロー宿泊所に一泊す、元來此バンガロー宿泊所は内地到る處にあつてホテルの代用をする物であるが、僅に一人の番人が附近の土人家屋に居る位のこと、宿泊所には誰も居ない、自分で食事を拵へ自炊でやる、番人にはランプの油代を拂ふのみだ、携帯の食糧品を開いてウイスキー杯を傾け、アルミニウム鑛業又はセルベック窒素肥料特許製造法などに付て三人にて快談之を久ふして愉快なる臥床の上に眠つた、印度内地の旅行には、飲用水の準備携帯が大切のとしてあつて、予等は飲料水の多數の瓶詰を携帯した、宿泊所の諸用は携帯した自動車に付いた運轉手の印度人をボーイ代りにして辨じた、自動車を汽車の貨車より降ろすのは乗せる時と同じ

く貨車に橋を渡して自働によつて乗降するのである、元來印度政廳の最も主要とする仕事は、國內の交通機關の設備擴張にあるのであるが、廣い國であるから中々鐵道ばかりではやり切れない、故に廣い道路を盛に開通しつゝあるの、是等の爲に土木技師の仕事が非常に多い、前に述べた、バンガロー宿泊所の如きもエンジニアース、バンガローと稱せられて居る位で、元來是等の土木關係の役人等の宿泊する爲に設けたものである、右の次第で道路は中々立派で人口稀薄な中央印度の廣漠たる地方でも道路だけは整然たるもので、五間幅乃至十五間幅位のものが四通八達して居る様である、從て自動車で旅行するには至極便利である、道が善くて人通りが稀れて且つ汽車線路を探し出して驛に着けば自動車は直ぐ貨車に積めて、更に他の方向に汽車旅行をすることも出来るからである。

早朝、ランタのバンガローを發して自動車は二十哩の速力で部落間の大道を馳せ晝頃ソムナプール(Somnapur)に到着し、其處のバンガロー宿泊所に小休止、携帯の中食を取り是より自動車を降り徒歩して山中に入り、ボーキサイト鑛床を視察した、此邊虎多く棲む、谷の小川の附近に虎の足跡を見る其形猫の足跡の如し、唯大なるは四吋徑のものあり、ボーキサイト鑛床視察の後更に自動車に乗り山間數哩を走りて、一の滿庵鑛床の在る處に達し下車して山を登り其鑛床を視る、此鑛床は片麻層の下に層狀を成せるものにして其厚十五呎、走向の露出四哩に至ると云ふ硬き等質の滿庵鑛なり目下米國カーネギー會社の所有に屬す。

夫より更に自動車にて走る、前方に道の中央に二羽の孔雀

(勿論野生)の歩きつゝあるを見携帶の獵銃にて一發を送るも逃げられた、更に先に至りて又四羽の孔雀あり道の上を歩行しつゝあり、更に一發を送りたるに一羽の傷けるを見たるも皆逃げた、夫より虎の多いと云はれる森林中を走る、途中滿俺鑛山の麓を過ぐ是は中央州探鑛シンジケート(Central Province prospecting syndicate Lt. England)と稱する英國資本家の企業(資本金壹百萬磅)に屬するものである、此山を右に見て走り漸く一小村落に出た、畑の中に狼の一種ジャコーが居つた、直に銃を向けて一發した命中したが、實彈でなかつたので又逃られた。

段々日が暮れて來た此邊道の兩側多くは森林にして猛獸多し、日の暮れた後、人の通行するものなし、勿論晝とても通行者は少ない、旅行者のために二三丁置き位に道傍の高い木の上に杖を集めて大きな鳥の巢の様なもの造つてある。途中日の暮れた時は是に登りて猛獸の襲撃を避けつゝ一夜を明かすの用に供すと云ふ、巢床は地上三十呎位が安全だと云ふ、予等は夕刻になつて自動車の一寸故障を生じた時も聊か當惑したがヘッドライトを明るくして虚勢を張つたこともある。

夜に入つて漸くバラグハット(Barraghatt)部落のバンガロに到着した、此地に住む英人の目付役(Chief Commissioner)を自宅に訪問して一寸敬意を表した。

十四日、早朝より自動車を馳せセヲニ(Seoni)部落に到りバンガローで中食した、是は中々上等なバンガローであつたミトラ(M. Mitra)と云ふ技師に此處で宿り合はせた、是は印度人であるが印度政廳第四位の高級技師で部下二千人を有

し年俸二千四百磅を受けつゝある人で、英本國へは戴冠式の時出た位で遊學したことはないとのことだが、英語は達者で人物も良かつた。

夫より又自動車を走らせた、道の左方の山の木の枝に雉の様なもの居た、マンス技師は車を降りてB、Bの一發を送つた、一度逃げたやうであつたが、後方の道の中央に落ちた、見れば頭より尾端迄六呎もある大きな孔雀であつた、夕刻シヤツブルポールのホテルに歸着した、又ダット氏の邸に晚餐に往く、今日獲た孔雀は早速料理された、孔雀は印度の英人等がビステキ鳥と別名して居る。

夫れはビステキの味がするからだと云ふことだ、兎も角美味な肉であつた、此日はバラグハットよりセヲニまで四十五哩セヲニよりジャツブルポールまで八十五哩、合計百三十哩であるが色々道草を食つたので長くかゝつた。

十五日、此日は日曜、休日とあつて一同がその爲に愉快なる野遊を試みることゝなつた、ダット氏夫婦、マンス技師セメント會社支配人、ダット氏小供二人及其家庭教師アイルランド婦人等が予と共に自動車を連ねてジャ・部落を出た、ダット氏は英國で學んでバリストルの學位を有し、妻君は相當教育ある英國婦人であつた野外に向て十三哩斗り走つて河の邊に着いた。

河を渡つてから馬車に乗つて行く、是からが有名な大理石の形勝地で其儘地名も英語でマーブル、ロック(Marble rock)と云ふ、先年英國皇帝が印度視察の時此地に遊んだと云ふ、河の兩岸に大理石や苦灰石が數百呎の斷崖絶壁をなし、一哩半に亘るのである一同が下流より小蒸氣船に乗つて靜かに此河

を上ると谷深くして日中尙薄暗さを感じ幽邃の氣人を襲ふ、殊に此邊河中には例の恐るべきコロコマイルが澤山繁殖して居ると云ふを聞いては一層氣味悪さを覺ゆる、兎も角も地理學上の一大奇觀である、岸の絶壁の割目に人の居るを見た、如何して茲に這込み得たか不思議である、彼は吾々の小蒸汽船が此幽邃天地の死的寂莫を破つて其前方を通りつゝあるに目も觸れず座禪を組んで瞑目して居る、是も印度にありと聞く信仰の人であるとのことだ。

船の遊山を濟まして河岸より登り部落に出づれば、土人の家の前に大理石で造つた鶏卵、象、馬等の模型を並べて賣つて居るのを見た。

此邊岩石は大理石と云ふけれども、先づ苦灰石か又は苦土の多い石灰石と見られた。

十六日、此日はバラブダス(Ballavdas)の王様(Rajah)の宮殿を拜觀に出掛けることにした、先づ受付に行く二人の英人の執事が居た、英人と云ふもこんな處で飼ひ殺される人々の事故氣力も容子も先づ土人と大差はない、次に其等の案内で二階の客室三階の舞踏室、夫より王家族の婦人室等を見た、宮殿は石造にて飾り煉瓦を用ひ、廊下も亦飾り煉瓦を敷詰めた、大體遠見は頗る美麗で一才人目を驚かすに足るが、近寄つては缺點だらけ手工設計共幼稚なること夥し、此王様は一千部落を所有する相當の有力者なりと云ふ。午後五時ジャ・驛を汽車にて出發六時三十分カトニ部落に着いた、手押トロリーに乗つてウマリア(Umaria)炭坑に行く、炭坑より二人の英人技師の出迎あり、一小ホテルに入り夕食を濟ませベンガローに入つて一泊す。

十七日、早朝炭坑を視察し夫より此地にあるシエラック製造工場及皮革工場を見る此工場の支配人宅にて朝食の馳走を受け、又トロリーに乗りウマリア驛に至り運炭貨車に便乗して午後二時三十分カトニ部落に着、先日見逃したる他のポキサイト鑛山を視察し、セメント會社支配人シムコック氏宅にて小休午後六時三十分カトニ驛より汽車に乗り、八時三十分サトナ驛に到着して下車し、直にバンガローに投宿す。

茲にて一寸禮装に着換へて英國公使(Political agency)を訪ひ夫妻に面會敬意を表した、印度全體を通じて斯様な王國は澤山ある、其内政は獨立で王様に人民の生殺與奪の權がある、唯外人と契約することのある時は目付役たる此英國の公使の様な人の承認を要するのだ。

前記炭山外二工場は當地方の王様の仕事である王様も中々工業家だ、皮は牛皮とコロコマイルの皮とが多い、牛皮は一平方呎八アンナ、コロコマイルの皮は幅に關せず一呎に付五ルピーで仕上げたものが買へる。

十八日、は早朝より携帶の自動車を驅りて土人部落を通ること三十八哩で其間リワ(Rewer)パンナ(Panna)等の數個の王國を歴て遂にパハリケラ(Paharikera)部落に到着した、是はパンナ王國の一部である此村のバンガローに一先づ休憩して是より自動車不通の山道になる、曩にパンナ王に電報で頼んで置いた象が三十八哩も歩いて來て予等一行を待合せて居つた、之れに乗つて山に入ることにした、六哩の間象背旅行をして遂にバタワのダイヤモンド採掘所に至る(Bhatkawa Diamond Valley)此處は相當大きなダイヤを採掘した處であつたが此程は休山中、設備も一向ない處で唯手仕事のみでや

つて居つたらしい、一應視察の後又象に乗つて、バハリケラ村に歸り中食して自動車に乗りサトナ (Sana) 部落に歸著した、此地に於て是迄同行した、マンス、ダット兩氏に別を告げて獨り汽車に乗り東の方日本に向つて歸路に就くことにした、兩氏は今度英國公使より晚餐に招かれた。

此日自動車駛走中、水牛の群に遭ひ屢通行を妨げられた、是等は何れ持主はあるのであらふが、見渡す限り村落は見へない人家はない野生も同然だ、歸りの時には日は暮れ近くなり、遂に一頭の水牛と衝突して其前足を轆き倒した。

前述べた通り午後八時三十分サトナ驛より汽車に乗つて出發した。

十九日、午前十一時バラカ (Baraka) 驛を通過する時汽車が徐行して居る間を見計らい、乗合客の助けを得、手早く手荷物を皆投げ出し置き、従僕フランシスと共に飛び降りた、是から近くに見ゆるクルチ村 (Kulhi) のベルガル製鐵所 (De-ugal Iron and Steel Co.) 迄歩行して所長フェーアハルスト (Fairhurst) 氏を其宅に訪ひ、中食の馳走と工場の案内を受け小休の後、氏自から自動車をドライブしてベンガル炭坑に至り歸つて後、晚餐の馳走を受け、夫よりストランプール (Strampur) 迄送られて、是より汽車に乗る午後九時五十四分發車した。

此日午後五時フェーアハルスト氏の社宅の廊下に掛つて居つた、寒暖計は華氏八十度を示した。(是が冬の十一月十九日)

二十日、午後五時三十四分ホワー (Howah) 驛に着した、即ちカルカッタ港に着いたのである、白石元治郎氏、岸本吉

右衛門氏、藤原藤一郎氏等來り迎へられた、グレートイースタイン、ホテルに投じた、久し振りでホテルらしいものに宿つた、又久し振りで町と云ふものを見た。

折角久方振りで人間の多く居るカルカッタ大市街と云ふものを見るに至つたが、二十四日此地より出帆する船で日本へ歸る都合上、時間を急ぐ必要ありて今茲に一夜を過すことが出来ぬ、午後五時ホワー驛發の汽車に乗つて、タタ製鐵所視察に出掛けた。

午後九時にタタ製鐵所の在るカリマチ驛 (Kalinachi) に着いた、茲に製鐵所總支配人印度の人パドシヤ (Padshah) 氏の出迎を受け、製鐵所専用鐵道に乗り換へて製鐵所に着し、所長ダーリングトン (Darlington) 氏社宅にて小休の後賓客宿泊所 (Guest Bungalow) に送られて之れに泊つた。

二十一日、朝ダーリングトン氏の自動車に同乗して工場に至り工場の案内を受け中食後、更に充分の視察をなし午後十時發の汽車にてカルカッタに向つて歸る、此時パドシヤ支配人及英國技師一人工場に對する予の批評を聞かん爲めにとて汽車に同乗して一時間計り來た。

二十二日、午前七時カルカッタに着いた、岸本吉右衛門氏出迎ひ呉れた、此日ジャツブルポールからもダット氏一族及マンス技師迄此地に集り來り將來の共同事業計畫の事に就て色々打合せをした。

二十三日、柴田帝國領事の官邸に朝食の馳走を受け西村正金支店長社宅に茶、阿部三井支店長の社宅に晚餐の響應に預つた、博物館其他市中の見物をした。

二十四、午前八時アランコラ (Arankola) 號にて白石氏と

同乗出發す、安部氏、西卷氏、岸本氏、前原氏等の見送りを受けた、一旦出發はしたが、去る二十一日頃ボンベイ地方に暴風雨ありて郵便物來着遅延と潮時の悪くしてガンヂス河口危険なるためとて、航海を續けることができず、空しく一夜を川上に停船することになった。

二十五日、午前七時三十分と云ふに至りて、初めてガンヂス河口を出發することが出来た。

昨日カルカッタ埠頭を出發する時には從僕フランシスも勿論見送つて來た、曩にボンベイで雇入れて以來半ヶ月餘り日夜予の身邊に附從して、衣服や沓や荷物や食事、風呂、便器の世話を妻の如く周到に、犬の如く從順にやり通して來て呉れた、彼は埠頭に立つて別れを惜んだ、殊に僅かながら予の與へた特別手當にも少からず感謝の意を表した、國が違ひ人種は違つても人情と云ふものには變りがないことを深く感じた。

(二) 印度視察事項概略

一、タタ製鐵所 (Tata Iron & Steel Co.)

カリマチ驛 (Kalmachi Station) の附近サクチ (Sakchi) に在り、鎔鑪は二基あり各高七十七呎、ボツシの徑十九呎、ハースの徑十二呎、第一號爐は一日百九十噸、第二號は二百十噸の銑鐵製造力を有し、合計四百噸即一ヶ年約十四萬噸と申すのが此製鐵所の能力である、銑鐵一噸に對し骸炭の消費二千六百ポンドである、骸炭爐は二組あり各組九十個の爐室より成る骸炭用の石炭は洗はずに用ゆ、洗ふとも炭質を良くすることが出来ないからである、石炭は製鐵所附屬の炭坑より汽車にて運び來り貨車の下からバツケットエレベーターで

貯炭槽の上上に在る、ジユインテグレーターに掛けて貯炭槽に落ち込ましむ、貯炭槽は一千噸の容量あり、爐には三臺の装入兼裝出機を附す、此頃は他の炭坑より購入した性質の違つた石炭を混用して居るので、骸炭の出來良しからず困難を感じ居れり。

鎔鑪に用ゆる石灰石は此邊には日本の様な純粹の物無く何れも苦土を多く含んでをり、此製鐵所でも苦灰石に近いものを用ひて居つた。

送風の壓力は八ポンドで溫度は攝氏一、一〇〇度、二本の鎔鑪の間に共通する様に鑄床が出來て、マグネットクレイン一個之を支配する、鑄床の側にある鐵道の上に橋があつて是れに一臺の銑鐵壓折機が据へてある。

鎔鑪の捲揚は米國風の斜道である。

汽罐はバブコック、ウキルコック式が十六本あつたが八本だけ使つて居つた。

製鋼工場では四十噸の平爐四基を持つて居るが一基だけ仕事をして居つた、各爐同形で爐内の長さ七、二〇〇耗、幅二、一五〇耗で爐の構造は極めて不良であつた、縦の方向には一本のアンカーポールも無いなどは驚くべしだ、噴出口の長さは短かきに過ぐ、目測でも一米突半位増す必要を感じる位だ、苦灰石は焙焼したものを作業中に用ひて居るが生焼けて白い、夫れも其筈、苦灰石焙焼爐を見れば煉瓦積だけで送つた堅窯で天然通風で焼くと云ふ仕末だ、職工は平爐の仕事場の熱い床の上でも例の跣足だ、稀には下駄の様なもの履いて居るが夫れも唯長方形の板で親指の股にてをさへるための棒が差してあるだけで鼻緒はない、職工の活動はとても出來

ぬ、平爐装入機は獨逸のステュッケンホルツ (Stückerholz) 會社製のハンギングタイプ一臺ある、鑄鍋起重機も亦同社製のものであるが、是亦一臺より外ない、平爐内積に用ゆるマグネサイト煉瓦は奥國カルスペーター會社から購入した、茲でも亦地水には困難して居る、雨期にてもなると蓄熱室の下部は直ちに浸水すると云ふ、平爐装入機のガーターは戸外に迄延長されて居て装入箱を地上より引上げるに便利にした。

混銑器は一個ありて、鎔銑の装入も出来ることになつて居る。

平均の装入には古鐵二五%を使用して居つた。

ロール工場に行て見れば是は製鋼工場よりも良く出来て居る、分塊ロールとレール・ミルとの中間に一六、〇〇〇馬力のスチームエンジンがある、次に一六吋バーミルと一〇吋スモールバーミルとがある、板にしてはない、工場に出来つゝある製品は軌條、溝、山形、工形等であつた、工形の内には高さ一六吋のものもあつた。

此製鐵所はカルカッタを距る百七十哩とある、夫れだけ深く印度内地へ入つて居る、何故こんな處へ造つたかと云ふと、夫れは石炭山と鐵鑛山と而してカルカッタとの經濟的中心點であつた同時に川の近くで水を得るの便があると云ふためである、川は工場から一哩の近くにある、又勞銀も石炭山近くよりも廉いと云ふのである。

經濟事情を調べると、石炭は附屬炭坑より來るものは工場着て、一噸三ルピー、八アンナだが他山より買ふものは坑山で四ルピーである。炭坑は工場を距ること百二十哩である、

故に他山より買つた石炭は工場着約五ルピーになる。

骸炭爐は前に述べた通り工場にあつて二組で一日に四百七十五噸の骸炭を造る第三組を目下建造中である、此骸炭爐で造つた骸炭は自家石炭のみで造れば一噸六ルピーで出来る、購入石炭を混ぜれば夫れだけ高くなる、骸炭工場ではコールタールの外副産物は取らない、硫酸アンモニヤは石炭に對して百分一しか取れないから取らぬことにした。當所の骸炭の性質は左の如し。

水	分	一・三〇%	氣	乳	三三・一二%
揮發	分	〇・八二%	實	質	六六・八八%
灰	分	一六・九二%	比	重	一・七三%
固形炭素		八〇・九六%	硫黃	分	〇・五七%

鐵鑛は本所を距る五十哩の所屬鐵山より來る其成分左の如し。

鐵	分	六一・八五%	磷	素	分	〇・二三五%	
硅	酸	分	四・〇八%	硫	黃	分	〇・〇三六%

價格は採鑛費一噸に付十一アンナ、工場迄の運賃(五十哩)八アンナ、工場着一噸の諸費合計約二ルピー。

勞銀は本製鐵所に従事する六千人の職工の平均が一ヶ月一人八ルピーで、一日一人に平均すれば約四アンナとなる(一ルピーは十二アンナである)、個人に就て言へば一日一人で八アンナ位まで取るものもある、職工は製鋼工場だけ一晝夜三更代でやる。

茲に注意すべきことは外國人給料の高ばることである、本製鐵所には合計百四十人の外國人が居る、事務部、技術部の役員より職工に至るまで重要な位置には英人、米人を使用し數人の獨逸人も居る、外國人の總支配人は年俸四千磅、次

席の支配人は三千五百磅、各部々長は一千五百磅、職工は最低でも年俸三百磅である、是等を合計して俸給は一ヶ年約十四萬磅となる、之に對して土人の職工は頭数は六千人でも一ヶ年四萬磅に過ぎないのである、故に此製鐵所では年間十四萬噸の銑鐵を造つても此外國人の給料が一噸當り我十圓ばかりに付くことになる。

此製鐵所の銑鐵製造力は年間十四萬噸と稱せられて居るが、確かな處は十二萬噸である、其内製鋼工場が故障なく働けば九萬噸を使ふことになるから他に向つての銑鐵供給力は年間三萬乃至五萬噸となる譯である。

二、ベンガル製鐵所 (Bengal Iron & Steel Co.)

バラカ又はシタランプール驛 (Baraka or Sitarampur Station) 附近のクルチ (Kulti) にある。

鎔鑛爐三本あつて其内二本を作業して一日百八十噸の銑鐵を造る、元來此製鐵所は此邊に澤山ある鐵分の多い、ラテライトのやうな鑛石を主として、炭坑の近くに創めたのであるが、此鑛石の多くは三五乃至四〇%の鐵分しかないので一時非常に困難したが其後マナプール (Manharpur) に良い鐵鑛山を發見して爾來之を使用して居つた。

製鋼工場とロール工場も形ばかり出來て居るが、製鋼が失敗したのでロールは殆ど動かしたこともなく、兩工場共に中止して居る、銑鐵は附屬事業としての鑄鐵管製造に多く使つて居る。

職工は土人一千人計り西洋人も數十人居る、土人職工の一人一日の平均勞銀は六アンナとなつて居る。
石炭は附近の附屬炭山より取り其成分左の如し。

揮發分	二六・三%	硫黃分	〇・五七%
灰分	一三・二%	燐分	〇・一九%
固形炭素	五九・九%		

是から出來た骸炭は其成分左の如し。

骸炭歩止り七〇、乃至七三、%(粉骸炭三、%を含む)

鐵鑛は其成分左の如し。

鐵分	六四・〇%	カリマチ鑛	四〇・〇%	チルビヤ鑛	四〇・〇%
不溶解分	四・〇%		二三・〇%		一八・〇%
燐分	〇・〇七%		〇・〇四%		一・〇%
滿掩分	〇・〇八%		〇・二〇%		二・五%

マナルプール鐵鑛を主として用ゆる様になつてから、作業經濟上の利益も多くなつたのみならず、良銑鐵の名を博するに至つた。

石灰石は印度普通のもので六乃至七%の不溶解分を含んだものである。

此製鐵所は英人の經營するもので、明治四十四年以來大阪の岸本吉右衛門氏一手販賣を引受けて居る、大正元年同氏が本邦に其製品を輸入したのが、抑も印度銑鐵が本邦に紹介せられた第一歩である。

當所の銑鐵は二種作つて居つた、其成分左の如し。

	ベンガル印				マンハルプール印			
一號	二號	三號	四號	一號	二號	三號	四號	
硅素	二・四〇	二・二〇	三・三五	一・七五	二・七五	二・一〇	三・三五	
硫黃	〇・〇一	〇・〇一	〇・〇一	〇・一五	〇・〇一	〇・〇一	〇・〇一	
燐	〇・五	〇・五	〇・五	〇・四	〇・三	〇・一八	〇・三	

滿 俺	0.50	0.50	0.55	0.60	0.65	0.70	0.75	0.80
黒斜炭素	1.50	1.55	1.60	1.65	1.70	1.75	1.80	1.85
化合炭素	0.05	0.10	0.15	0.20	0.25	0.30	0.35	0.40
鐵(差引)	2.50	2.55	2.60	2.65	2.70	2.75	2.80	2.85

三、ウマリヤ炭坑 (Umariya Coal Mine)

此炭坑は遠く内地にあるリワ王國の著名の炭山である(日記參照)

主要鑿坑の深百七十呎、採炭場所の深二百呎乃至二百五十呎、炭層のチツプは二十分一、ストライキは北西より東南、炭層の數五枚あり、五呎、七呎、五・六呎、四呎、八呎なり、地質は三世紀層、上盤は砂岩、チツプに於て四千呎、ストライキに沿ふて六千呎を稼いで居る、坑夫一千人を使用す採炭法はヒルラー式、費用は一噸に付合計二ルピー六アンナ二、賣價は山で三ルピー六アンナ、G・I・P 鐵道會社に一ヶ月一萬一千噸、其他は附近地方に一ヶ月四千噸宛賣却する。右鐵道會社は自分の炭坑を他に有すれども、此地方へ持つて來る時は一噸一一乃至一二ルピーに付く、故に此炭坑より買ふと云ふことである。

此炭坑はリワ王國の内に在り炭坑附近は一千エーカーの地面が一ヶ年二千ルピー位で借地することが出来る、此炭山を利用して日本人などが何か工業を起すなら王様は大に歡迎すると云ふことである。

四、滿俺諸鑛山

中央州探鑛シンデケート (Central Province Prospecting Syndicate, Ltd. England) の事は既に述べたが、資本金一百万磅を有し、バラクハットより三哩を距るバルベリ (Baharbeli) に大なる滿俺山を有し此時迄に既に二百萬噸を輸出した。

カーネギー製鋼會社 (Carnegie Steel Co. U.S.A.) はソムナポール、グドマ、ウクワ (Sonapur, guduwa, Ukuwa) と云ふ三村に亘りて一大鑛區を有す、バラグハットを距ること約二十六哩の邊にあり、是は元ダット氏の借區であつたが氏は之を前記會社に譲り渡した、譲り渡しに際しての交渉を聞くに鑛量に付てダットの調べは三百萬噸なりと云ひ、カーネギーの調べは百萬噸なりと云つて結着せず、依てダット氏の申出の十萬磅一時拂ひと云ふことを撤回し、其代り一時に二萬磅の現金支拂をなし、之に對し三十萬噸まではカーネギーが無償で採取する、三十萬噸以上になると一噸に付十片のローヤリチーを支拂ふこと、而して採取すると否とに拘らず一箇年四萬噸迄のローヤリチーは支拂ふこと、而して此事は採掘に堪ゆる鑛石の存在する限り履行を續くることとした、タタ製鐵所の滿俺鑛山はピラグハットより十三哩の地に在り此時鐵道引込線の布設中であつた。

五、ボーキサイト鑛山

カトニの鑛床の外にソムナポールに十八哩に亘る鑛區、バハル附近に十五哩に亘つた鑛區を見た、是等は皆ダット氏關係の鑛區で合計廣表七十五平方哩の面積を有す、予はセルベツクの窒素肥料製造法の適用可能に於ては、アルミニウム製造をも兼ねたる有利なる一大鑛業たるべきを察し、本社を印度に、工場を日本に有する日英合同の一企業たるべき價値あるものとし、ダット氏の鑛業權分割の契約をなして歸朝した。

歸朝の後白石元治郎氏と相談の上本邦に於ける最も著名なる資本家三十餘名の人々の賛同を得て硫酸アンモニヤ調査會

なるものを作り、恰も日本に來合せたる高峰博士に近藤工學士を附して佛國に急行、セルベック法の調査研究をして貰つた、セルベック法のサポイ研究所も未だ完全に成績を擧げぬ内に大戦の勃發で企畫は中止された。併しながら鑛量の大きなことゝアルミニウム含有の高いこととで印度のボーキサイトは世界將來の唯一のアルミニウム寶庫であることは今日も尙變りはない。

六、雜 件

鑛山の試掘は二個年期限で、面積の大小に論なく一期限間料金二ルピーに過ぎない。

採掘のローヤリチーとして一噸に付二ルピーの税を取られる、但し採掘となつて居りながら仕事をせぬ時は、一エーカーに付て三ルピーの鑛區料を上納するを要す、政府は兩方を比較して金高の多い方を課するを得、採掘年限は二十個年。

鐵道運賃は製鐵事業の様な保護を受ける性質の事業に對しては一噸百哩一ルピーとなつて居る。

鑛山などに要する鐵道支線の布設は費用三十年賦償却て容易にやつて呉れる、夫れも全額を拂はなくとも良い。

七、狩 獵 の 事

印度は實に動物の樂園であると同時に、狩獵家に取ては此位面白い處はないと思ふ、夫れと云ふのは土人は殺生を好まず、又狩獵も許されないから動物は繁殖次第であるためだ、先づ鳥で云へば鳩などの多いことは丁度日本の雀の様に人近く群がり來つてうるさい、色は黄、綠、白などの美しいものが多い野生の孔雀も多い、丁度日本の雉位にしか感じない、鶴、鶯、鴨、野猿、狐、ジャコウの如きも一日の内に度々出

會したが、殊に驚いたのは小鹿 (Deer, antelope) などが時々群をなして自動車の前途を邪魔することである、虎は王様の貴客接待獵のためとあつて、猿は宗教上神聖物として共に狩獵を禁じられてをるが、他はなんでも打てる、虎や豹の多いため日中でも路傍の藪に入ることは危険としてある。

八、一二の印度語

こちらへ來い!	イダラウ	(Idaru)
早	ジャルデー	(Jaldy)
君の名は何と云ふ?	ナンキヤハイ	(Nankihai)
森	ジャングロー	(Junglow)
水を持つて來い!	マニロー	(Manilow)
右	ダイナ	(Daina)

(完)